



地域日本語支援ニュース こだま 第 305 号

2016.10.13



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

====目次=====

1■ともに生きる■

国はどこですか?～難民として生きるということ～

カディザ・ベゴム

2■AJALT からのお知らせ■

9 月に「リソース型生活日本語」が新しくなりました

3 ■高校進学進路ガイダンス情報 (10、11 月) ■

=====

1■ともに生きる■

国はどこですか？

～難民として生きるということ～

カディザ・ベゴム

カディザさんがはじめて日本語のクラスに来たとき、日本語は一言も話せませんでした。それから 10 年が経ち、今は二人の子供のお母さんであり、職場でも周りの日本人スタッフから頼りにされる存在です。今回は、難民として生きるということ、そして周囲に求められる支援について、大変に具体的な形で書いていただきました。当事者の貴重な声を、ぜひ多くの方に届けたいと思います。

国はどこですか？ これは異国に住む外国人たちがよく聞かれる当たり前の質問で、その人のアイデンティティそのものを問うものです。私も日本に来て

からあらゆるところでこの質問をされました。皆さんにとっては、簡単に答えられる質問ですが、私にはこれ以上難しい質問はありません。なぜなら、自分には自分のことを国民として認めてくれる国はないからです。

私は、ミャンマーの少数民族ロヒンギャの出身で、生まれ育ったのはバングラデシュという国です。およそ 1,000 年以上の歴史があるとされるミャンマーの少数民族ロヒンギャのことをミャンマーの政府は国民として認めず、世界で最も迫害を受けている少数民族とされています。

ミャンマーの少数民族ロヒンギャの医師だった父は、政治活動を理由に身に危険を感じ、バングラデシュへ避難しましたが、バングラデシュは私たちにあって全く安全なところではありませんでした。私たちのことをバングラデシュ人としても認めず、ロヒンギャという正体を知られたらミャンマーに送還されるという危機感をずっと感じながら何とか高校を卒業し、日本で難民認定されたロヒンギャの夫と結婚が決まり、2006 年 12 月 30 日に来日しました。

日本に来てからは、自分の国籍はちゃんと答えられないけれど、“難民”というアイデンティティがあります。日本では、難民というとイメージ的にあまり望ましくないところがあり、決してうれしくないアイデンティティですが、難民であってもみんなと同じように笑い、食べ、喜ぶ、悲しむ、夢を持つ人間であることを皆に知らせなければならないと強く思います。それができるようになるために一番大事なのは、教育を受けることだと思います。難しい日本語や、高い教育費などの問題の壁にぶつかりましたが、RHQ 支援センター（注 1）や UNHCR 難民高等教育プログラム（注 2）の支援を受け、青山学院大学を卒業することが出来ました。そして、ユニクロの難民インターンシッププログラム（注 3）に参加することができ、現在ユニクロで店員として働いています。

今の私は難民であることをちっとも恥ずかしいと思いません。ちゃんと日本語でコミュニケーションができるようになり、ちゃんとしたところで働くことによって周りの日本人とお互いに尊敬あい、信頼感を持てるようになりました。

自分は誰なのか、自分にはみんなと同じような可能性があり、夢があり、国や人々のためになれる力があり、この世の中をよくするため貢献できる希望があることを自分自身で伝えなければなりません。ちゃんと教育を受けることによって、難民であっても、これらの可能性を発揮することができ、周りの日本

人と信頼関係を築くことができると信じています。しかしそのためには温かい心遣いや支援がぜひとも必要です。特に、生きるためにすべてを捨てて、何もない状態でほかの国に逃れてきた難民たちが夢を失わないように、自立できるまで支えていただかなければなりません。教育や仕事の機会があれば、人間は可能性に向かって頑張れます。結果的に難民として受け入れた国のプラスにもなると信じています。日本では、難民認定された方に RHQ 支援センターでの 6 か月間の日本語と生活の基本を学べる機会がありますが、日本語を十分に理解し、引き続き大学で学ぶため、あるいは良い仕事に就くためには不十分です。

また、大学で勉強できる機会がなかなかありません。UNHCR の高等教育プログラムの奨学金制度があってもわずか数人です。そして難民たちを積極的に受け入れる会社もわずかです。これらの機会はもっと増やすべきだと強く感じます。

今の私には、自分の民族や世界の難民問題に何かの形で貢献できるようになるという夢、そして自分の子供たちはイメージの悪い難民ではなく、なんでも挑戦できるたくましい人間として育てるという願望があります。5 歳の息子、3 歳の娘そして夫と家族 4 人でこの夢に向かって日々歩んでいます。日本で難民というイメージが良い方向に変わる日まで、私たちの挑戦は続きます。

【編集部注】

注 1) 難民事業本部 RHQ 支援センターは日本政府の委嘱を受け、難民やその家族が日本社会で自立した生活を営むために必要な日本語教育、社会制度や生活習慣・文化・保健衛生等に関する生活ガイダンスや就業支援などの定住支援プログラムを行っている(6 か月の昼間コース、1 年の夜間コースとがあるが、時間数は同じである)。

注 2) UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) は、難民に高等教育の機会を提供するとともに、受け入れ国や出身国に貢献できるための資質を獲得する機会を与えるため、一定の難民を提携した大学に推薦している。提携大学側は、その授業料や諸費用の負担を行う。

注 3) ユニクロは日本国内の店舗で難民の人々に職業体験の場を提供することで、自立を支援する取り組みを行っている。3 か月～6 か月間、店舗でのインターンシップの機会を提供。インターンシップ終了後には正規に雇用される道も開かれている。
